

事例4 国語科「今月の詩を読もう」授業の実践（小学校特殊学級）

1. 学級（集団）概要

(1) 児童数

- ①全校児童数900名弱，知的障害児学級と情緒障害児学級（いわゆる固定式）がある。
- ②知的障害児学級在籍児童数：4年生2名（A児・B児），6年生1名（C児）計3名
- ③情緒障害児学級在籍児童数：1年生3名，2年生1名，3年生1名，4年生2名，6年生1名 計8名

(2) 指導体制

- ①知的障害児学級（あおぞら1組） 担任1名
情緒障害児学級（あおぞら2組） 担任1名 介助員1名 生徒指導助手1名
- ②特別活動，道徳と日常生活の指導，遊びの指導，生活単元学習（一部）は合同で学習する。

(3) 週時程について

- ①総時数は学年相当の時数だが，児童の実態に応じて各教科の時数は異なる。

表1「あおぞら1組 指導形態別授業時数配当表」（年間時数）

教科等		4年 A児	4年 B児	6年 C児
合わせた 指導	日常生活の指導	35	35	35
	生活単元学習	70	70	70
	遊びの指導	147	105	140
教科別の 指導	国語	140	140	140
	社会	35	35	35
	算数	105	140	97
	理科	35	77	70
	音楽	40	40	39
	図画工作	64	64	35
	家庭 体育	95	95	35 94
道徳	35	35	35	
特別活動	38	38	38	
自立活動	35			
総合的な学習の時間	70	70	70	

計	979	979	968
クラブ活動	9	9	12
学校行事	59	59	82
児童会活動	19	19	30
教科等外	45	45	27
総計	1111	1111	1119

②朝の会、月～木曜日の1時間目、金曜日の1・2時間目にあおぞら1組2組が合同で学習する。

表2「あおぞら1組 週時程」

	月	火	水	木	金
	朝の会	朝の会	朝の会	朝の会	朝の会
1	学級会	合科・統合	道徳	合科・統合	合科・統合
2	*	*	算数	*	(あおぞらタイム)
3	*	*	*	*	*
4	*	*	*	*	*
5	*	*	国語	(クラブ・委員会)	*
6	*	(学びタイム)	*		国語

注 *は児童によって、それぞれ教科が異なる時間

火曜日・木曜日の「合科・統合」は「日常生活の指導」「遊びの指導」を中心に行う
金曜日の「あおぞらタイム」は「生活単元学習」を中心に行う。

③交流学习は児童の実態に応じて設定している。

A児・B児：音楽，図工，体育，総合（体験活動，見学等），給食

C児：音楽，体育，総合（体験活動，見学等），給食

④国語科の学習はそれぞれの児童の実態に応じてカリキュラムを作成しているが、「今月の詩」「お話を読もう」の単元は、同一の教材でそれぞれの指導目標のもとに学習している。

(4) 年間指導計画（表3参照）

2. 一学期の実践の経過

(1) 実践の概要

今年度から本学級（知的障害児学級）を担任することになった。前担任からの引き継ぎをもとに児童の実態把握から始めた。3人の児童は読み聞かせやビデオなどには興味を示し、楽しんで視聴することができた。しかし、文字は習得しているが、「読むこと」に対する実態には大きな開きがあり、関心・意欲の差も大きかった。

そこで、まず声に出して読むことに楽しく取り組ませたいと考えた。長文には抵抗があるので、1枚プリントの詩の音読に取り組むことにした。1枚プリントなら読む

量がわかり見通しが持ちやすい。また、詩はリズムがあり、声に出して読むことを楽しみやすいからである。

季節感がある詩や内容を楽しむ詩、手拍子をしながらリズムを楽しむ詩など、読むことがマンネリ化しないように内容に変化を持たせている。3人が一緒に学習できる時間に初めてその詩に出会うようにした。次のような学習パターンをつくり、見通しを持って学習に臨めるようにした。

範読を聞いてから自分で読む→内容を一緒に考える→詩を視写する
→家庭で練習する（宿題）→学校で互いの音読を聞き合う

「今月の詩」ではあるが、習熟の様子を見ながら1か月に何点かの詩を学習することもある。3人の児童のそれぞれのカリキュラムが異なるためそれぞれ違う教材で学習することが多いが、同じ教材を一緒に学習することで関わり合いをふやし、互いを認め合うことも願った。

日	題名	お家の人のかんそう	先生
6/20	たまゆさ	上手に読みました	●
6/23	たまゆさ	お家で読んでみました	●
6/24	たまゆさ	お家で読んでみました	●
6/25	たまゆさ	お家で読んでみました	●
6/26	たまゆさ	お家で読んでみました	●
6/27	まゆり	上手に読みました	●
6/28	まゆり	上手に読みました	●
7/1	まゆり	上手に読みました	●
2	白いぼうし①	上手に読みました	●
3	まゆり	上手に読みました	●
4	白いぼうし①	上手に読みました	●
5	白いぼうし①	上手に読みました	●
7	白いぼうし①	上手に読みました	●
8	白いぼうし②	上手に読みました	●
9	白いぼうし②	上手に読みました	●
10	白いぼうし②	上手に読みました	●
13	白いぼうし②	上手に読みました	●
14	白いぼうし②	上手に読みました	●
15	白いぼうし②	上手に読みました	●
16	白いぼうし②	上手に読みました	●

(2) 児童の実態

A児（4年）

- ・経験したことは定着しやすく、課題や活動に積極的に取り組むことができる。しかし、初めての場面では、困っていても「わかりません。」「手伝ってください。」等の言葉が出にくく、黙って相手が何か言ってくれるのを待っていることが多い。相手の顔を見つめて確認を求めることもある。また、周囲のことが気になり、自分の課題を忘れて他の児童の活動をじっと見入ったり、ボーッと自分の世界に浸っていたりすることもある。

- ・最初はたどたどしいが，練習を重ねることで気持ちをこめて音読することができる。
- ・筆圧が弱く，細かいところにまで気を配って文字を書くことはできにくい。
- ・読み聞かせや話は静かに聞くことができ，内容も理解できる。関心を持って聞いたことはよく覚えていて他者に伝えることもできる。
- ・語彙は豊富である。交流学級など大きな集団では言葉は少ないが，家庭や地域，あおぞら学級のように気心の知れた小集団では饒舌である。
- ・聞いたことは良く覚えている。家庭で聞いたニュースや天気予報等の情報を学校で話すことも多い。移動図書館では「電車」「はたらく自動車」のような写真絵本を好んで借りる。

B児（4年）

- ・こだわりがあり，ティッシュでものを作って自分の世界に入り込んでしまうこともある。しかし，見通しが持てると課題や活動に意欲的に取り組み，集中時間も長い。
- ・ひらがな，カタカナ，教科名や曜日の漢字は読めるが，文になると一字一字押さえながら読む。リズムのある文を喜んで読もうとする。
- ・ひらがな，カタカナは一通り書けるが，「おにの『お』」「きつねの『き』」のように言葉を思い出し，確認を求めながら書く文字もある。文字は乱雑になりやすい。
- ・読み聞かせや話は静かに聞くことができる。繰り返し聞いたり見たりすることで内容が理解しやすくなる。
- ・語彙は少ない。助詞がなく，2～3の単語を並べて話す。言葉が出にくく，押したりたたいたりしてコミュニケーションすることもある。
- ・興味関心を示すものは限られている。「宇宙戦艦ヤマト」「もののけ姫」「千と千尋の神隠し」「ウルトラマン」などのアニメが好きで，毎日のようにビデオを繰り返し見ている。移動図書館では乗り物や怪獣の写真絵本を好んで借りる。

C児（6年）

- ・新しいこと，見通しが持てないことに拒否反応が強いが，自信を持つと意欲的に取り組む。
- ・ひらがな，カタカナ，教科名や曜日，自分の名前，住所など日常よく目にする漢字は読み書きできるが，音読は苦手で，小さな声で早口で読んでごまかしてしまうこともある。興味のある内容は，読もうとする。
- ・バランスよく文字を書くことができにくく，乱雑になりやすい。
- ・読み聞かせや話は静かに聞くことができるが，内容の理解は不十分な時もある。
- ・情報通でおとなとの関わりがほとんどなので，難しい言葉を使うこともあるが，基本的な言葉でも意味を理解していないものもある。
- ・テレビ番組から様々な知識を得ているが，断片的な内容でつながりや深まりは少ない。テレビ番組やゲームのことはよく話しかける。進んで本を借りること

は少ない。

(3) 単元の指導計画

①単元目標

- ・楽しく音読する。
- ・作者の気持ちに寄り添う。
- ・詩を視写する。

②指導計画

第1次 音読と視写…………… 1時間

第2次 音読練習……………国語の授業毎に5分間と毎日の家庭学習

(合計時数は作品毎の習熟の程度によって異なる)

第3次 音読発表…………… 1時間

(4) はじめの授業展開と児童の様子

一番最初に取り組んだ詩は、「春」がテーマだった。教科書にあった「春の歌」を1枚プリントにしたものを配ると、A児は嬉しそうに、すぐ声に出して読み始めた。B児も一緒になって読みたがろうとした。しかし、C児は黙読を始めたが、声に出そうとはしなかった。

範読を聞いてから、指導者も一緒にみんなで読んだ。A児の声だけが聞こえる。「一人ずつ読んでみよう。」と働きかけると、A児はゆっくりだが「春の歌」を声に出して読んだ。B児は指導者と一緒に声に出して読んだ。〈ケルルンクック〉というところが気に入った様子だった。C児は、口は動いているが声が聞こえなかった。「もう少し大きな声で読んでね。」と働きかけてみたが、ボソボソと聞こえるだけだった。春の野原の様子を思い浮かべられるように説明をしながら言葉を確かめていったが、絵も写真も用意していなかったため、その場の様子をイメージすることは難しそうだった。

声に出して読むことにつながるように、文字や言葉を確実にとらえさせたいと考えていた。そこで、「手で読む」と言われる視写にも取り組ませたいと思った。

音読用のプリントと同じ升目の用紙を準備していたが、視写を始めると「どこ?」「ここかな?」とそれぞれに尋ねた。写している行の横にもものさしを当てて、意識しやすいように支援をした。しかし、文字や行をとばしたり、写し間違いがあったりしても自分で気付くことはなかった。視写することは初めてで、とても時間がかかった児童もいた。視写した用紙は教室内に掲示することにした。

写し終えたことには達成感を感じていたが、詩を読んだり視写したりすることを楽しんでいる様子はいくつか見られなかった。

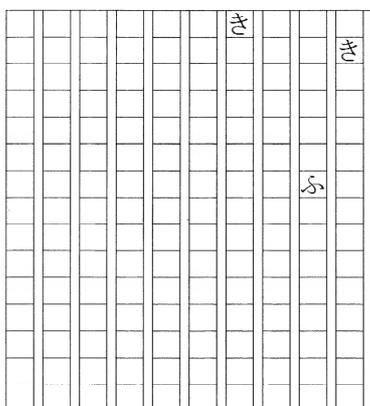
(5) 授業づくりの検討事項及び留意点

内容理解や作者の思いに寄り添うことが難しい。
→絵や写真を活用する。
→児童の日常生活に関わりのある教材を用いる。
視写する時に行を間違えたり、文字を飛ばしたりすることがある。
→用紙を工夫する
学習意欲を高める。
→興味を持ちやすい教材を選ぶ。
→授業の中に感動する体験を仕組む。

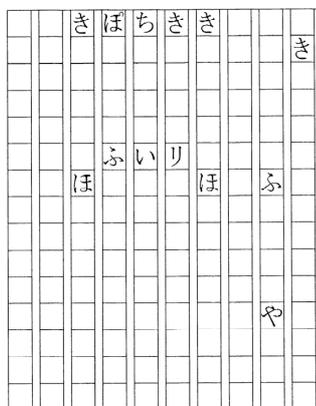
(6) 改善した授業展開と児童の様子

○教材選び「やさいたちのうた『きゅうり』」年少版こどものとも 福音館刊
児童の毎日の生活に関わりのある教材の方が興味・関心を持ちやすいと
考えた。学級園で栽培していたたまねぎをとりいれ、さつまいもを植え付け
た時期に野菜の詩を集めた「やさいたちのうた」に取り組むことにした。
○絵や写真の活用
きゅうりの花や花のついた実を見せることが内容理解を促すことに効果的
であると考えた。どのように花が咲き、実が成長していくのかということも
知らせたいと思い、デジタルカメラで記録しておいた。
○視写用紙の工夫
どの行を写しているのかわかりやすくするために、行頭の文字を薄く印刷
しておく。児童の実態の応じて行頭だけにしたり、分かち書きの最初の文字
も入れたりした。

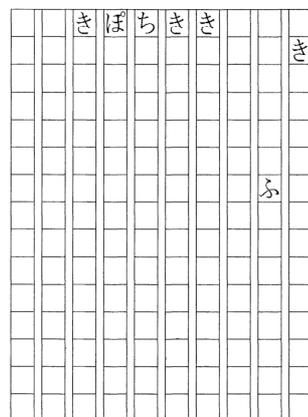
〔A児用視写用紙〕



〔B児用視写用紙〕



〔C児用視写用紙〕



①本時の目標

A (4年)

- ・楽しみながら，意味を考えて音読する。
- ・言葉から〈ほしのしっぽ〉のイメージをふくらませる。
- ・言葉の単位でとらえて視写する。

B (4年)

- ・楽しみながら，はっきりと音読する。
- ・写真で〈ほしのしっぽ〉を確認する。
- ・一字ずつ確かめながら視写する。

C (6年)

- ・楽しみながら，言葉を意識して音読する。
- ・言葉から〈ほしのしっぽ〉のイメージをふくらませる。
- ・言葉の単位でとらえて視写する。

②学習の展開

学習活動	指導上の留意事項	評価規準	評価方法
1 挨拶をする。	・学習の始まりを意識させる。 (着席して姿勢を正す。)		
2 学習課題を確認する。	「きゅうり」の詩を読もう		
3 学習の見通しを持つ。	・読み聞かせをする。 ・一緒に読む。 順番に一行ずつ，交代で音読する。 言葉として読めるよう支援する。	・言葉としてとらえて読む。(A) ・指導者と一緒に読む。(B) ・聞こえる声で読む。(C)	観察
4 学習課題を深める。	・「ほしのしっぽ」とは何のことか考えさせる。 〈ほし〉と〈しっぽ〉に分けて考える。 ・きゅうりの花の写真を見て「ほしのしっぽ」を確認する。 ・詩をていねいに視写さ	・ほしとしっぽを思い浮かべることができる。(A・C) ・ほしを思い出すことができる。(B)	観察

5 まとめをする。	せる。 詩のプリントと同じサイズの用紙を準備する。 ・ 写した詩を読む。	・ 大きな声で読む。 (A・C) ・ 1文字ずつ押さえて読む。 (B)	観察
6 挨拶をする。	・ 学習の終わりを意識させる。(姿勢を正す。)		

③児童の様子

詩のプリントを配った時、作者の名前を見て「『ふじとみ やすお』どっかできいたなあ。」とA児が言った。「やさいたちのうた」の中から、「たまねぎ」「にんじん」「かぼちゃ」に続いて4作品目の「きゅうり」だったからだ。A児はパラパラと前のプリントをめくりながら確かめた。C児も「先生『ふじとみ やすお』シリーズじゃなあ。」と嬉しそうに読み始めた。彼は前の作品の作者を覚えていた。作者を意識してくれていたことが指導者の方も嬉しかった。

今までは、声に出して読むことを嫌がり、読みたがろうとしなかったC児だったが、その日は一番最初に読みたいと立候補した。大きな声で、ほとんど間違ふことなく読むことができた。読み終えた時は、他の児童から拍手が起こった。C児の顔からは得意げな笑みがこぼれていた。

次に読んだのはB児だった。まだまだ、たどり読みの段階だが、読むことは嫌がらず、一生懸命一字一字を追っている。「き」「ゆ」「う」「り」とB児が読んだ後、指導者が「きゅうり」と読むと続けて「きゅうり」とB児も模倣するという感じで、5行を読み終えた。ここでも拍手。お互いの音読を聞き合うことができるようになってきた。

最後はA児。読むことが得意な彼は、はっきりとした声で余裕を持って読んだ。みんなから拍手をもらい彼も満足そうだった。

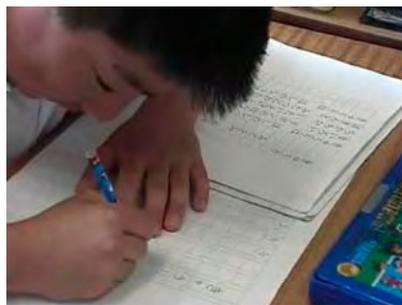
詩に〈きゅうりはほしのしっぽです。〉というのがある。花が小さなきゅうりの先についている様子を見たことがある大人にとって、この表現はその姿を見事に表現したものだと感じることができる。しかし、「ほし」という言葉と「しっぽ」という言葉を知っていても、一度もきゅうりの花が咲いているところを見たことがない児童にとっては、その姿をイメージすることはできなかった。テレビや実物の花を見て、やっと「うん、ほしに見える。」と言った。



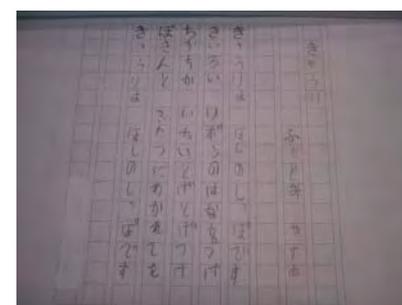
もぎたてのきゅうりを見て、児童の関心を集めたのは、きゅうりの〈ちかちかいたいとげとげ〉だった。きゅうりを持たせようとする手を引っ込めてしまったA児。それでも思い直しておっかなびっくりの手つきで手のひらにキュウリを載せた。とげとげの感触を楽しんでいたB児、C児。B児は他の人にもきゅうりをさわらせてくたせようがない様子だった。



その後は、いつものように視写に取り組んだ。視写用紙を配るとA児が「あっ、ヒントがある。」と薄く印刷した文字を見つけた。「やったー。」と叫んだのはC児だった。「今日は、めっちゃ短い。」と嬉しそうだった。「きゅうり」の詩は短いということを差し引いても、はじめの頃、視写を嫌がったり、写すだけで1時間の授業が終わりそうになったりしたことが嘘のように、3人とも黙々と視写を始めた。ヒントの文字が薄く印刷してあるので、「ここ?」「どこ?」と尋ねなくても自分で見つけて写すことができる。読み返す、確かめるということもできるようになってきていたので、正確に写すこともできるようになってきた。掲示するというのもわかっているので、自分の「今月の詩」の厚みが増すことを楽しみに視写するようになってきている。



A児は今までの詩も暗唱したことがあった。暗唱できた時の喜びをC児にも味わわせたいと思った。「みんなで覚えてみようか。」と声をかけると、どの子も乗ってきた。「そんなの簡単。」とC児も言った。



板書を押さえながらみんなで一緒に読んだ後、題名から1行ずつ消していった。消したあとの板書を押さえながらみんなで暗唱していった。2行目を消しては1行目と2行目を暗唱する。3行目を消しては、1行目と2行目と3行目を暗唱する。……こんな調子で最後の行まで行った。

「一人で言えるかなあ。」という呼びかけに「ぼくが一番。」と名乗りを上げたのはC児だった。張り切っている。やる気満々だ。C児の生き生きした顔が印象的だった。見事覚え



ていた。次に「〇〇〇」と自分の名前を連呼したのはB児だった。C児に刺激されたのか、B児のやる気も見えた。指導者と一緒にB児も暗唱した。最後はA児だったが、宙を見つめながら、ゆっくりと、はっきりと暗唱した。3人とも詩を暗唱できたことがとても得意そうだった。

〈ぼきんと ふたつに…〉とある。「本当に『ぼきん』と音がするのかなあ。」というつぶやきが聞こえてきたので、きゅうりを折ってみることにした。代表で6年生のC児にと思ったが、やってみたいのはどの子も同じはずなので、1本ずつ折ってみた。その日の朝、もいだけばかりのきゅうりは、「ぼきん」と音を立てて二つになった。大喜びのB児が「食べよう。」と言った。授業のはじめには、「きゅうりは嫌い。」と言っていたのに…。早速洗って、みんなでそのまま丸かじりをした。野菜が苦手なC児は食べようとはしなかったが、B児は「うまい。」「うまい。」と大満足の様子だった。

3. 一学期の取り組みの成果と課題

(1) 児童の変容

声に出して読むことが苦手だったC児が「一番に読みたい。」と言えるようになった。家庭学習の本読みをしていない日が多かったが、毎日読むようになり、「お家の人の感想」にも「上手に読めました。」と書いてもらえるようになった。学校でも家でも褒められることが励みになり、「今月の詩」以外の音読も進んでできるようになってきた。また、暗唱できたことが大きな自信になり、別の詩も覚えようとしている。

B児も「今月の詩」のプリントを見れば読もうとするようになった。以前は、指導者が一緒に読まないと言った途途中でやめることもあったが、一人でも最後まで読むことができるようになった。

A児は上手に読めるようになると「暗唱する」ということが定着し、その後もたくさんさんの詩を暗唱できるようになっていった。

(2) 授業づくりの成果

野菜の収穫や植え付けの体験をした時期に、野菜の詩を集中的に学習することで学習に対する意欲付けができた。同じ作者の詩ということも作品に対する関心を深めることができた。「きゅうり」の詩は短いことが、読むこと、視写することへの抵抗を軽減した。暗唱するまでに読むことに対する意欲を高めることができた。

きゅうりの成長の様子を写真で見せたことや花やきゅうりの実物にふれさせたことが、内容の理解の手助けとなった。また、学習に対する意欲を持続させることにもつながった。実際にきゅうりを折ったり食べたりすることは指導の計画にはなかった。しかし、児童の中から自然にその要求が出てきて、それに応える形で授業が展開していった。

同じパターンで学習を重ねることによって、1時間の学習に見通しが持てるようになり、安定して学習に取り組むことができるようになってきた。視写用紙の配慮によ

り、「自分でできる」という安心感も気持ちの安定につながったように思う。

また、3人とも詩を読むことを楽しめるようになり、次の「今月の詩」はどんな詩だろうかと期待することができるようになってきた。

(3) 課題

詩の音読を通して、声に出して読むことに抵抗が少なくなり、言葉やリズムのおもしろさを味わえるようになってきた。児童が「読んでみたい」と思えるような作品を提示できるように教材研究を深めたい。また、児童の興味・関心が広がるような生活を一緒に作っていきたいと思った。

詩から短い物語や説明文へ、さらに長文へと読むことが楽しめるように学習のステップを作っていきたいと考えた。

また、「大きな声で読めた」「暗唱できた」という自信を他の学習や生活に生かせるように支援していきたいと考えた。

4. 二学期の実践の経過

(1) 実践の概要

1学期からの取り組みによって、声に出して詩を読むことには抵抗がなくなり、読むことを楽しむことさえできるようになってきたが、進んで本を読むことは少ない。乗り物の写真絵本や図鑑のようなものはよく見てはいるが、自分の目で文字を追って文章を読み、内容を楽しむといことはほとんどなかった。

そこで、「今月の詩」の取り組みに平行して、2学期は「お話を読むことを楽しむ」というねらいの授業も行った。

(2) 改善した授業展開と児童の様子

○教材選び…「徳間アニメ絵本『千と千尋の神隠し』」徳間書店刊

映画を元に作られたアニメ絵本である。児童にもなじみ深い映像がそのまま挿絵として使われている。また、話も子ども向けにわかりやすくまとめられている。そこで本を読んで楽しむことが少ない本学級の児童に本を読む楽しさを味わわせることができるのではないかと考えた。

読むことに最も抵抗が大きいB児が興味を持っているのでこの教材に決定した。

○挿絵やビデオの活用

文章だけでは内容理解が難しく、楽しむことができないので、絵本の挿絵やビデオを手がかりにしながら読み進めることにした。この本文はどの挿絵の場面か探すことや、それぞれの場面での登場人物の表情を比べることで気持ちの変化を読み取ったり、登場人物の服装や建物の様子で「人間の世界」と「ふしぎの国」の違いを感じ取ったりできるのではないかと考えた。

○動作化や役割読み

動作化や役割読みをすることも、場面の様子を読みとったり、登場人物の気持ちに寄り添ったりするために有効ではないかと考えた。動作化の雰囲気盛り上げるために〈ニガダンゴ〉や〈ハク竜（の頭）〉を用意した。

①単元目標

- ・本を読むことの楽しさを味わう。
- ・お話のあらすじや場面の様子を読みとる力を養う。
- ・わかったことや感想を話したいという意欲を育む。

②指導計画（全5時間）

第1時 ふしぎの国

- ・挿絵の表情や建物，服装を比較する。
- ・動作化をする。

P27 〈いきをとめ，少年にしがみつきながら，橋をわたっていききました。〉

第2時 湯婆婆との契約

- ・役割読みをする。

P56 「お父さん，お母さん，…」

P57 「お父さん，お母さん，…」

第3時 お湯屋のお客さん

- ・動作化，役割読みをする。

P82～83 〈湯婆婆が千尋をだきしめていました。…〉

第4時 魔女の契約印

動作化，役割読みをする。

P103 「わたしの大切な人が，…」

P113 「これ，河の神さまが，…」

P119 「ハク，きつともどって…」

第5時 ハクと千尋…本時

動作化，役割読みをする。

P137 「坊を，つれもどしてきます。…」

P144 「おばあちゃん，やっぱりかえる。…」

P146 「もうだいじょうぶなの？よかった。」

③本時の目標

- A児
- ・お互いを助けたいと思い銭婆のところに行った千尋とハクの気持ちに共感する。
 - ・あらすじがわかり，話の展開に興味や関心を持つ。
- B児
- ・千尋とハクがお互いを助けようとしていることがわかる。
 - ・絵本を読んだり，ビデオを見たりすることを楽しむ。

- C児 ・千尋とハクがお互いを助けたいと思う気持ちがわかる。
 ・あらすじがわかり、話の展開に興味や関心を持つ。

④学習の展開

学習活動	指導上の留意事項	評価規準	評価方法
1 挨拶をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の始まりを意識させる。 (着席して姿勢を正す。) 		
2 学習課題を確認する。	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>「ハクと千尋」の場面を読もう</p> </div>		
3 学習の見通しを持つ。	<ul style="list-style-type: none"> ・読み聞かせをする。 本文と挿絵の結びつきを意識させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・銭婆婆のところに 行った千尋とハク の様子や成り行き に興味や関心を持 って聞く。(A ・C) ・挿絵に興味や関心 を持って本を見る。 (B) 	観察
4 学習課題を深める。	<ul style="list-style-type: none"> ・セリフを言うことで、 千尋を助けたいハクの 気持ちを考えさせる。 P137「坊を、つれもど してきます。…」 ・セリフを言うことで、 ハクを助けたい千尋の 気持ちを考えさせる。 P144「おばあちゃん、 やっぱりかえる。…」 P146「もうだいじょう ぶなの？よかった。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・声色を変えること で登場人物の気持 ちを表現する。 (A) ・誰のことばかわか る。 (B) ・登場人物の気持ち を考えることがで きる。 (C) 	観察
5 まとめをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ビデオを見ながら千尋 とハクの気持ちを再確 認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・興味や関心を持っ てビデオを見る。 	観察
6 挨拶をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の終わりを意識さ せる。(姿勢を正す。) 		

⑤児童の様子

最初時間に今日から「千と千尋の神隠し」を学習することを伝え、アニメ絵本を手渡すと3人とも嬉しそうに受け取った。「このおはなしにでてくる人びと」のページを開き登場人物の説明を大きな声で競うように読み始めた。このページは、その後も新しい登場人物が出てくるたびに、自分たちで読み返し確認した。

指導者が「ふしぎの国」を読み始めると、どの子も食い入るように自分が手にしている本を見ていた。B児は挿絵を指さしては「ちひろ」と喜んでいた。

「今読んだところはどの絵かな。」「時計塔ってどれかなあ。」「22ページの千尋の顔はどんな気持ちかなあ。」と確かめながら読み聞かせをした。

第1時は〈いきをとめ、少年にしがみつきながら、橋をわたっていきました。〉というところを、千尋役とハク役を交代しながら動作化した。C児は動作化することが恥ずかしそうにしていたが、A児やB児がしているのを見てやる気になったようだった。B児はこの時のことを、口を押さえながら「ちひろした。」と何回もあおぞら2組の友だちや先生に伝えた。

授業の最後は、学習した場面の一部のビデオを見た。3人とも本と見比べながらビデオを見ていた。

次の日、登校すると、3人とも何も言わなくても、早速アニメ絵本を開いて読んでいた。「先生、今日も『千と千尋の神隠し』勉強するんじゃろ。」「早うしたいなあ。」と言った。今日は全員揃った国語がないのでできないことを伝えるとがっかりした表情だったが、次の日の国語の時間を楽しみにしていた。その日の国語の時間はバラバラだったので、それぞれで、昨日学習した場面の本読みをした。

他の学習時間でも課題が早く終わると、児童が「先生『千と千尋の神隠し』読んでもいい?」と尋ねることが多くなった。この本を読みたがっていることがわかったので、家に持ち帰らせることにした。1日2ページ本読みができたらいいなと思っていたが、A児は毎日4ページ読んで来た。B児もC児も忘れず読んで来た。

その日以後、B児は朝学校に来ると時間割表を押さえながら「国語5時間目ある?」と尋ねるようになった。国語の授業を3人の児童がこれほど楽しみにしたのは初めてだった。



第5時「ハクと千尋」いよいよ最後の場面だ。役割読みにも慣れて人物毎に声を変えながら読めるようになってきた。湯婆婆の声には迫力がある。千尋の声には気持ちが入ってきた。読むことを楽しんでいる。

動作化は、元気になって銭婆婆のところまで千尋を迎えに来たハク竜に頼ずりしながら

「もうだいじょうぶなの？よかった。」と千尋が言う場面だった。A児は優しい声で、B児は嬉しそうにハク竜に声をかけた。照れていたC児もハク竜に頼ずりした。

この日ビデオを見ている時、B児は千尋になりきっていた。映像の中の動きに合わせて、ハク竜にまたがり空を飛んでいた。そして、登場人物のセリフを話し、効果音まで口まねしていた。毎日のようにビデオを見ているB児の心の中には「千と千尋の神隠し」の世界がしっかり焼き付けられているのだろう。



5. 2学期の取り組みの成果と課題

(1) 児童の変容

絵や写真が中心の本を好んで読み、文字が多いと敬遠していたが、「千と千尋の神隠し」のアニメ絵本は喜んで読むことができた。詩より長いものでも一人で音読できるようになった。「もっと読みたい。」という意欲が出てきた。

お話の感想を友だちどうして話したり、指導者や他の大人に話そうとしたりするようになっていった。学習したことを「こんなことがわかったよ。」「こんなふうにしたよ。」と他の誰かに伝えたいという思いが高まっていった。

(2) 授業づくりの成果

児童の興味ある題材、大好きな題材に取り組むことで毎時間の学習を楽しく進めることができた。また、国語の授業そのものを楽しみにすることもできた。学習意欲を高め、主体的に取り組ませることができた。

動作化や役割読みによって言葉の意味理解を助け、登場人物の気持ちに寄り添うことができはじめた。挿絵と本文を結びつけながら読むことも内容理解につながった。ビデオを見て、内容を再度確認することで理解が深まったように思う。

動作化や役割読みをすることで、少しずつ心が解放されて表現意欲が高まってきた。恥ずかしがって動作化をしないだろうと言われたC児もみんなと一緒に活動することができた。A児の表現は一層深まり、本読みの中でも登場人物毎に声色を変えて読むようになった。最後のページまで読み切りたいと思うようになった。

(3) 今後の課題

一人ひとりの児童が「またしたい。」「明日もしたい。」と思い、今度は「こんなふうにしたい。」と自分なりの計画が持てるような授業を作っていきたいと思う。そのためには、児童の興味・関心に応じた題材を発掘し、提示の仕方や展開の方法、視聴覚教材の活用などの教材研究・教材づくりに取り組みたいと思う。

3人の児童に「千と千尋の神隠し」以外のアニメ絵本を見つけて読んで欲しいと思う。そして、それがきっかけになっていろいろな本へ関心を向けて読むようになることを願っている。

